

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和四年八月十三日(土曜日) 午後五時開演

狂言 蚊相撲(かずもう)

江州守山は蚊の名所であるそうです。人ほどもある蚊の精が血を吸いに都へ出る街道で、新参者を探す太郎冠者に行き合い、召し抱えようという大名の館へ伴われます。得意の芸は相撲と答えて大名と手合わせします。蚊の精に刺されて目を回した大名は、生国を確かめて相手が蚊の精と気づき、もう一番相撲を取ることにします。今度は大団扇であおいで蚊の精をよろけさせますが、喜ぶすきに小股をすくわれてまた敗れます。腹いせに大名は行司の太郎冠者を打ち倒します。

能 西王母(せいおうぼ)

官人(アイ)が出て聖代を称え、今日はこの御殿に行幸があるから参内されよと触れた後、過去に例を見ない聖徳の帝王(ワキ)が臨幸し、光り輝く御殿には大臣(ワキツレ)はじめ百官卿相が列座、四方の門には千戸・万戸の諸侯が群集しています。そこへ侍女(ツレ)を伴った天女(前シテ)が訪れ、三千年に一度花が咲き実の成る桃を、その時機を得た聖主に献上したいと申し出ます。帝王がそれは伝え聞く西王母の園の桃かと確かめると、天女は帝王の恵みが行き渡ること感じて桃の花が咲き、天女が天下るのであると答えます。天女は天上の楽しみの中で年を経る西王母の分身であると名乗り、後刻桃の実を持って真の姿を現すことを予告して昇天します(中入)。帝王と大臣たちが音楽を奏して待つうちに、孔雀・鳳凰・迦陵頻伽など、数々瑞鳥が飛び廻るなか、紅錦の衣をまとい、剣を腰に提げ、晨纓(鷹の羽の飾り)の冠を戴いた、真の姿の西王母(後シテ)が降臨します。西王母は侍女に持たせた玉盤から桃の実を受け取り、帝王に捧げます。花を浮かべた盃を手に酒宴もたけなわ、袖も裳裾も翻して美しい舞を披露した西王母は、花や鳥と共に春風に乗り、空のかなたに翔り去ります。

(西村 聡)

前シテ(西王母) 面(増又は小面又は泣増) 鬘 鬘帯 箔 唐織
後シテ(前シテ同) 面(泣増又は小面) 黒垂 天冠 箔 色大口 腰帯 長絹 扇